

アントニー・トロロブ（作）

「翻意した牧師の娘」

松 岡 光 治（訳）

イングランド南西部の高原地、ダートムアにオクスニー・カウンという教区がある。この美しい地方の景勝地をすべて見たい人にとっては、オクスニー・カウンでの逗留がもっとも望ましいだろう。その地方の他のどこよりも、ここには逗留者が訪れたいと思うような場所のすべてが近くにそろっているからだ。しかしながら、そのような地形の場所であっても難点が必ず一つはあるものだ。この教区には社会的地位のある者の家がたった二軒しかないのである。それはどちらも——この地方のことを筆者が初めて知った時もそうだったが——こじんまりとした家で、家の所有者自身が居住している。大きな、より良い家の方は牧師館で、そこには牧師とその娘が住んでいた。小さい方はミス・ル・スマージャという女性の住居であり、彼女は百エーカーの自由土地保有者で、それをクロイジーという農家の男に貸していた。彼女には自宅の周囲にも三十エーカーほどの土地があって、そちらは自分自身で管理しており、固形クリーム作りにかけてはクロイジー氏といい勝負、リンゴ酒については自分が完全に勝っていると思っていた。そのようにミス・ル・スマージャが挑発的な態度で腕自慢をする時はいつも、クロイジー氏は「ですが、あなた様は地代を払う必要がないじゃないですか。払っておられれば、そんな悠長なことなんかできっこありませんよ」と言ったものであ

る。ミス・ル・スマージャは五十歳の老嬢で、由緒ある家の血縁者であり、合計すると百三十エーカーの土地をダートムアの辺境に所有しているだけでなく、頑として譲らない気質の女性であり、この世のありとあらゆる問題について自分なりの意見を持っていた。

それはさておき、ここで牧師とその娘に話を戻そう。牧師の名前はウルズワージー——周囲に住む人たちの発音に従えば、ウラジー——ソール・ウルズワージーである。娘の方はペイシャンス・ウルズワージーという名前で、デヴォン州のその^{かいわい}界限ではミス・パティとして知られていた。ペイシャンスは彼女の名前として良い選択とは言えなかった。というのも、彼女は気が短くて、堅く信じていることに関してはつい熱くなってしまい、自分の信念を腹藏なく表に出しがちな娘だったからだ。この世に腹心の友は二人しかおらず、その二人も彼女が子供の時から今までずっと、そうした彼女の自由な物言いを完全に許してくれていた。ミス・ル・スマージャも父親も、こうした彼女の特性に慣れてしまって、たいていの場合はそれに甘んじていた。前者の老嬢は彼女に負けず劣らず自由気ままで気短な性格であった。後者のウルズワージー師については、宗教という専門があることから、自分の得意分野で貫録を示すことが許されていたので、他の分野では娘にマウントを取られることに異を唱えることもなかった。ペイシャンスはとても美しい娘である。美しさがほめたたえられ、性格の強さが重視されるような都会で生活していたならば、称賛と注目に値すること間違いなしの美点をたくさん持っていた。しかし、ダートムアの辺境にあるオクスニー・コウンには、彼女の真価を理解してくれる人間などほとんどいない。彼女自身、自分の才能が永遠に埋もれてしまわないように、はるか遠くの地へ行ってみようなどとは、ほとんど考えたこともないようであった。

ペイシャンスは背が高くて細身で、目と髪が黒い、美しい娘である。その目は正真正銘の美人というには真ん丸すぎ、髪は細くて縮れすぎて

いたかもしれない。大きな口は表情ゆたかであったが、素晴らしい形の鼻は、女性の容姿について一家言もっている人であれば、ちょっと幅広いと言うかもしれない。しかし、彼女の表情は全体的に見てすごく魅力的だ——相手を支配せずにおくものかという、時として玉に瑕^{きず}になりかねない点がなければの話だが、その点が時として逆に彼女の魅力を増すこともあった。

ここでペイシャンス・ウルズワージーのために言っておかねばならないが、彼女は自分が置かれた境遇から仕方なく支配権を振うしかなかったのだ。十六歳の時に母を亡くし、兄弟姉妹もいなかった。いつもミス・ル・スマージャがそばにいてくれたが、この老嬢を除いては、教育の点でも階級の点でも、彼女の生活や行ないに関与してくれる隣人は近くにいなかった。この老嬢は若い女性の道徳や牧師館の家事全般の監督を含めて何でも教えてくれただろうが、それはペイシャンスがそうした取り決めに満足した場合の話である。実際はどうかと言えば、ペイシャンスはいつも老嬢のことが大好きだったものの、その取り決めには甘んじることができず、自分自身の強い影響力を行使せずにはいられなかった。この強い影響力を彼女は幼い頃から発揮していた。筆者が詳しく説明しようとしている彼女の性格も必然的にそこから生まれたのだと言ってよい。とはいえ、この若い娘が支配力を行使したのは他人に対してだけではなかった——と、ここで彼女のために言っておく必要がある。そういう力を獲得する際に、彼女は自分自身を制御するという、もっと大きな力も同時に獲得していたのだ。

ミス・ル・スマージャには妹がいて、オクスニー・コウンの教区には妹の相続した資産が現在そこに住んでいる姉と同じくらいあった。とはいえ、この妹は姉と違って美貌も受け継いでおり、若い頃には選り取り見取りの求婚者がいて、そのうちの一人が現在の夫になっていた。その結婚相手は当時でさえ裕福だったが、今では大金持ちで権勢を誇ってい

た。国会議員で、あれやこれやの委員会の議長をやり、イートン・スクウェアに屋敷を構えると同時に、イングランド北部に大邸宅を持っていた。そのようなわけで、この妹と我らがミス・ル・スマージャの人生行路には雲泥の差ができてしまった。しかも、この政府委員会の議長は大勢の子供に恵まれていたので、たぶんデヴォンシャー州に住んでいる妻の姉の地所に関心を抱くのが得策だと考えていたかもしれない。だが、この姉、すなわちペネロプ伯母さんは自分の地所を好きな人に遺贈する権限を与えられていた。イートン・スクウェアでは、彼女は当然ながら自分たちの誰かに地所を残してくれるはずなので、親類の者が彼女とちょっと面談すれば、この件はより確実なものになるかもしれないと思われていた。その件がジョン・ブロートン大尉による今回の訪問の唯一の理由だと言うつもりはないが、この時まさに彼は伯母さんを実際に訪問しようとしていた。ブロートン大尉はイートン・スクウェアとクラパム・パークのアルフォンソ・ブロートン、国会議員および前述の政府委員会議長の次男である。

「その方をどうなさるつもりですか？」とペイシャンス・ウルズワージーはミス・ル・スマージャに尋ねた。この老嬢が甥のジョン・ブロートンは翌朝やって来るということを伝えに自宅から来てくれた時のことである。

「どうするつもりかですって？ まあ、お父さまと話をさせるために、こちらに連れてくるつもりですよ」

「上流社会の方なので、そんなことは……お父さまだって相手がダートムアを好きじゃないって分れば、頭を悩ます必要もないでしょうに」

「でも、恋に落ちるかもしれないわよ、おまえ」

「まあ、そうですね。とにかく、そういう退屈しのぎは確かにあります。伯母さまのために、私はお父さまよりも丁重に扱ってさしあげますわ。でもね、その方は恋愛ごっこにすぐ飽きちゃいますよ。そうなったら、

伯母さま、どうなさいますか？」

ブロートン大尉はオクスニー・コウンに来て、そこに——当初の予定滞在期間は三日か四日と決まっていたのだが——二週間も逗留してから帰って行った。その時はイースター休暇の終わり頃だったので、彼はロンドンの行きつけの場所に戻って行ったのだ。しかし、立ち去る際に、彼は秋には間違いなく戻って来ると伯母に言ったそうである。

「ジョン、また会えるなら——ある目的があつて戻って来るなら——私も嬉しいよ、間違いなく。そういう目的がないんなら、離れたままでいる方がいいわ」

「間違いなく戻ってきますよ」と大尉は答えてから、帰路に就いた。

* * * * *

ブロートン大尉のロンドンへの出立から四ヶ月が経過していた。その間ずっとミス・ウルズワージーはいつも通り日常業務をこなしていた。彼女は以前ほど家庭のことに気をつけなくなり、貧しい隣人たちの所に行きたがらなくなり、父親に対する心配りにも根気がなくなったが、そうした彼女の姿に気づく者は一人もいなかった。しかし、それにもかかわらず、彼女の周囲の者たちは彼女の身に起こった大きな変化をそれとなく感じていた。彼女は、夏の長い黄昏^{たそがれ}の時間帯によく、牧師館の果樹園の外の、一頭の乳牛が放牧されている小さな傾斜した野原の上端にある特定の場所に腰を下ろしていたものだ。膝の上に本を置いてはいたが、読んでいる様子はなかった。美しい景色が眼下の曲がりくねった川まで広がっている。そのような場所に座って彼女は沈みゆく太陽をながめながら、考え、考え、ひたすら考えていた——口にしたことが一度もないことについて考えていたのである。しばしばミス・ル・スマージャはそ

こで彼女と出くわし、時には何も言わずにそばを通り過ぎたものだった。とはいえ、勇気を出して相手の思いの丈について尋ねることは決してできなかった。老嬢には彼女の思いの丈が十分すぎるほど分かっていて。ペイシャンス・ウルズワージーはジョン・ブルートンに恋している——そうだ、完全に心を持って行かれるほど恋に落ちているのだ。告白などされなくても、老嬢にはそのことがよく分かった。

ある日の夕方、ペイシャンスがそのように座っていると、やがて七月の沈みゆく太陽が隠れて夜になった。荒野の散策から戻ってきた父親と出くわしたのはその時である。「パティじゃないか」と彼は言った。「いつも今時分はそこに座ってるのかね？ 遅すぎやしないか？ 寒くないかい？」

「いいえ、お父さま、寒くはないわ」

「でも、家に入らないかい？ 入るのが遅くなってしまい、寝る前に時間がなくて、お休みも言えないのは寂しいからね」

彼女は立ち上がり、父に続いて牧師館に戻った。一緒に居間に入って背後でドアが閉まると、彼女は父に近づいてキスをした。「ねえ、お父さまのもとを離れなきゃならなくなったら、とても悲しい思いをさせるかしら？」

「離れなきゃならんだって！」と彼は言ったが、娘の真剣な、厳粛とも言える声の調子に驚いていた。「永久に、という意味かね？」

「私が結婚するようなことになったら？」

「えっ、結婚かね！ いやいや、悲しい思いなんかしやしないよ。おまえが愛する人と結婚するのなら、パティ、とても嬉しい気持ちになるさ——とても、とっても嬉しい気持ちにな。おまえがいないと、わびしい毎日になるだろうがね」

「そこなのよ、お父さま。私がいなくなると、どうなさるつもりなの？」

「何か問題があると言うのかね、パティ？ 心に重くのしかかっている

現在の責任から少なくとも解放されるはずさ。おまえがいなくなったら、どうするかだって？ あと数年もすれば、おまえ、私はすべてが終わってしまうよ。でも、おまえ、相手は誰なんだね？ 誰かがおまえに何か言ったのかね？」

「ただの思いつきよ、お父さま。そんなことはあまり考えないんだけど、あの時はたまたま考えてたんです」

それで、この話題はそのまま放置されてしまった。このことが起こったのは、例のブロートン大尉の再訪の日が完全に確定し、ミス・ウルズワージーに知らされる前だった。

そして、その二度目の訪問がついになされた。読者は、ミス・ル・スマージャが甥っ子にオクスニー・カウンの再訪を許可した時の言葉から、ミス・ウルズワージーの恋愛がまんざら認められていないこともないと理解されたかもしれない。ブロートン大尉は、ある目的があって戻って来ないのであれば、再訪しなくてよいと告げられていた。そう告げられても、彼はなお来ることに固執したのであった。彼が伯母にほのめかされた意味を十分に理解していたことは間違いない。「ぼくは必ず戻って来ますよ」と彼は言っていたからだ。そして、その言葉どおり、彼は今そこにいた。

ペイシャンスは、ブロートン大尉がニュートン・アボットの鉄道駅に到着する予定の時刻も、駅からオクスニー・カウンまで十二マイルの坂道を越えるのにかかる時間も、正確に知っていた。言うまでもないことだが、その日の午後、彼女がミス・ル・スマージャの家を訪れることはなかった。しかし、そこに行かずとも、彼が近くまで来ていることはなんとなく分かっていたかもしれない。彼がオクスニー・カウンに向かう道は牧師館の門のそばを通っていたため、ペイシャンスは寝室の窓辺に座っていれば、彼の姿が見えたはずだ。だが、その日の朝、寝室の窓辺に座るつもりはなかった——恋人が来るのを待ちわびて、そわそわして

いる自分を責めるようなことはしたくなかったのである。自分を探し求めているのは彼の方なのだし、そうしたいのなら、牧師館への道は分かっているはずだ。

ミス・ル・スマージャ——善良で、いといい、正直者で元気な老嬢——は、盟友のために不安であわてふためいていた。だからと言って、甥っ子がペイシャンスと結婚することを望んでいたわけではない——いや、もっと正確に言えば、彼が最初に彼女たちの所に来た時も、そのような望みを抱いていたわけではない。彼女は縁結びが好きなのでもない。さらに、オクスニー・カウンに住む自分たちは、イートン・スクウェアの若者に来てもらわずとも、うまくやって行けると考えていた。いや、前々から心の中でそう思っていた。この老嬢の人生計画は、牧師のウルズワージーがダートムアから天に召されたら、その娘は自分と一緒に住み、自分が「浮世の煩わしさから脱した」あとは、オクスニー・カウンの地所とクロイジー氏の農場とを所有する独身の女主人になり、ブロートン家全員に大きな失望を味わわせるがよいというものだった。それは甥っ子が再訪する前の計画——ペイシャンスが遺児となる父の死までは口に出せない計画であった。とはいえ、その甥っ子が現れた今、すべてを変更しなければならなかった。ミス・ル・スマージャの計画は老後の話し相手を見つけることであったが、それは今では彼女の主たる目的ではなくなった。彼女は自分自身のことよりもペイシャンスのことを考えていたし、この盟友には今やもっと幸せな前途が開けているように彼女には思えた。

「ジョン」と、ミス・ル・スマージャは最初の挨拶が終わるとすぐ甥っ子に言った。「最後の言葉、憶えてるかい？ おまえが立ち去る前に言ったことだよ」

さて、筆者自身はミス・ル・スマージャの誠意というものを高く評価しているものの、思慮分別については大したことがないと思っている。

彼女の場合は、おそらく、成り行きに任せた方が吉と出ることが多かったからである。

「どうだったかなあ」と大尉は答えた。にもかかわらず、彼はこの最後の言葉を実際よく記憶していた。

「おまえに会えて嬉しいよ、とっても嬉しいよ。もし——もし——」と彼女は言ってから、口をつぐんだ。彼女は勇気を振り絞っても、甥っ子がミス・ウルズワージーに求婚する目的だけのために舞い戻ってきたのかどうか、その質問を思い切ってすることができなかった。

実を言うと——短篇小説という制限の中では謎を仕込む余地がないので、単純明快な真実を端的に言えば——ブロートン大尉はその質問をすでにペイシャンス・ウルズワージーに対して投げかけていた。オクスニー・コウンを立ち去る前の日、彼は牧師の娘に決まり文句でプロポーズしていたのだ。それに先立ち、彼はペイシャンスが最高に甘い蜂蜜のように耳で味わえる言葉を何度も熱く語っていたので、その流れで求婚せざるを得なくなったのである。そのような立場にいる男が来る日も来る日も娘に愛の告白をしていたならば、彼女のもとを立ち去る日には、何か明確な趣旨があることを語らないといけないのではないだろうか。そうしなければ、彼は嘘つき、自己中、詐欺師とさえ呼ばれることに甘んじなければならない。しかしながら、ブロートン大尉がした求婚は正直で真剣なものであった。彼は正直に、真剣にそうしたのだが、それは言葉というか、愛する娘の誇り高い心を満足させるのに十分とはとても言えない口調でなされた。その時までには彼女は、彼を心の底から愛していると自分自身でも認めていたが、そうした告白をまだ彼には実際していなかった。相手に対して彼女は、恋人であれば当然ながら相思相愛の印と見なされるような言葉をかけたり、好意を示したりしていなかったのだ。彼の話に耳を傾けながらも、そのような言葉は裕福な上流階級の人からなる社交界の友だちのために残しておくように頼んだ。すると、彼

は突如として彼女の手を握って大きな声で求婚した——おそらく、希望に打ち震える求婚者としてではなく、自分が購入したいものを自由にできと思っている分限者^{ぶんげんしゃ}としてそうしたのである。

「このことはもっとよく考えた方がよろしいですわよ」と彼女は最後に言った。「もし私を本当に妻にしたいのなら、たっぷり時間をかけて考えてから、またここに戻って来ても遅くはありませんわ」

こう言って彼女は彼をロンドンに立ち去らせたのだが、今また彼はオクスニー・コウンに戻ってきたわけである。

* * * * *

ペイシャンスは、その日、彼が自分の所に来るなどと、自分を偽ってまで思いたくなかったので、台所や家の中を忙しく動き回りながら、二人の女中にいろいろと指示を与えていた。それゆえ、この家では今日の午後も普段どおり過ぎ去るように思えた。ペイシャンスたちはいつも四時に夕食をとり、今のような夏の時期は、その時間より前に家から遠くへ出かけることは滅多^{めった}になかった。この日、彼女は四時きっかりに父と食卓に就いてから、夕食後はヘルプハウムまで行って来ると言った。

六時に父がささやかな楽しみのトディーを飲み終えると、帽子の紐を縛って単身で散歩に出かけた。足早に家を出る際に、どの道を通って行くかについて父には何も言わなかった。彼女は、オクスニー・コウンに通じる小道をどんどん進んでいる間も、ブロートン大尉が自分の方に向かって来ていないかどうか、確かめる気などなかった。道からそれて、石の踏越し段を乗り越え、最初は高台の野原を通り抜け、それから荒地を横切ってヘルプハウムに通じる小道に入った時も、彼女は一度も後ろを振り返らず、彼がやって来ている足音に耳をそばだてることもしなか

った。

彼女はヘルプハウムの借地人の年老いた寝たきりの母親のそばに一時間以上もいてやった。「お嬢さまに神様の祝福がありますように！」と、彼女は帰り際に言われた。「それから、お嬢さまの人生行路を明るく照らして幸せにしてくださる、そんな方が遣わされますように！」

これらの言葉は、ペイシャンスがげっそりやせた農家の女と別れてから、最初に越えた石の踏越し段の所で待っていたジョン・ブロートンの姿を目にした時まで、ずっと彼女の耳に意味ありげに残っていた。

「パティ」と、彼は彼女の手をとり、自分の両手でしっかり握りしめながら言った。「君を追いかけるのは大変だったぜ！」

「ブロートン大尉、誰が頼んだのかしら、そんなこと？」と、彼女は笑みを浮かべて答えた。「ロンドン暮らしで体力のない方にとっては大変な旅だったでしょうに。明日の朝までお待ちになれば、牧師館で会いましたのに」

とはいえ、彼女は彼から手を引っ込めることも、恋人として自分に近寄って話をする、そんな権利なんか彼にはないふりをすることもしなかった。

「いや、とても待てなかったよ。君はそうじゃないみたいだけど、ぼくは大好きな人に会いたくてたまらなかったんだよ」

「私の大好きな人が誰か、どんなに会いたいと思っているか、どうして分かるんですか？ あそこに大好きな年輩の女性がいます。彼女に会うためなら、歩く距離なんか何とも思いませんわ」と彼女は言って、彼から手を引っ込めながら、先ほど後にしてきた農家の方を指さした。

「パティ」と、彼はしばらく間を置いてから言ったが、その間ずっと彼女は大きな目で彼の顔をじっと見つめていた。「ぼくは今日、ロンドンから真っすぐ、このオクスニー・コウンまで来て、伯母さんの家から君の足取りをずっと追って来たんだぜ。あの質問をするためだけのため

にね。ぼくのこと、愛してるかい？」

「まあ、まるでヘラクレスみたい！」と、彼女はまた笑いながら言った。「ホントに今朝ロンドンを出たばかりなの？ まあ、最後に歩いた時間を除いても、汽車の中に五時間、郵便馬車の中に二時間もいたんですね。もっと自分の体を大切にされた方がいいですよ、ブロートン大尉！」

もし彼女が話の最中に手を彼の腕に置いていなかったら、彼は腹を立てていたであろう——しつこく質問されるのが嫌いだったからだ。実際には、腕に置かれた手の柔らかな感触で、彼女の言葉の不愉快さは軽減されていた。

「ぼくがしたことはすべて、君からひと言、聞きたいからなんだよ」

「私の言葉にそんな力があるなんて！ でも、父が私たちを荒野の立^{りつ}石か何かと間違えるといけないんで、このまま歩き続けましょう。伯母^{せき}さまは元気だと思われましたか？ この一週間ほど、伯母さまの肩にのしかかった重荷がどんなものか、お分かりになればいいんですがね。この荒涼とした、兵糧攻めにあったような地域で、どうすれば甥っ子が十分に飲み食いできるかという心配ですよ、それは」

「そんな心配、伯母さんはしなくてよかったのに。ぼくほど無頓着な男はいないからね」

「でも、あなたが自分の倶楽部^{クラブ}の料理人を自慢してるのを耳にしたことがありますわよ」と彼女は言った。それからまた、沈黙が一、二分ほど続いた。

「パティ」と言って、彼はまた小道で立ち止まった。「ぼくの質問に答えてくれ。答えを求める権利があると思うんだ。ぼくのこと、愛してるかい？」

「愛してたら、どうなるんでしょうか？ あなたには完璧な点が多すぎて、私の弱い心では耐えられないことを愚かにも認めてしまったら、どうなりますかね、ブロートン大尉？」

「君はぼくを愛していないんだ。でなきゃ、こんな時に冗談なんか言わないからね」

「たぶん、そうですわね」と彼女は答えた。彼女は自分自身のユーモアについては一歩も譲らないと決めているかのように見えた。それからまた二人は歩き続けた。

「パティ」と彼は繰り返して言った。「今夜——今晚、今現在、君と歩いている間に返事をもらうからね。さもないと、明日には帰って、二度とふたたび、この場所には戻ってこないぞ」

「まあ、ブロートン大尉、あなたなしで、どうやって私たちに生きて行けとおっしゃるんですか？」

「結構だ。この散歩の終わりまでは、君の話をすべて聞こうじゃないか。そのあと、ひとこと言ってくれれば、すべて解決するよ」

この間ずっと、彼女は自分が彼を不当に扱っているような気がしていた。彼を心の底から愛していることは分かっている。彼と別れるのは命が縮む思いだろう。彼の新たな申し出を聞いていた時は、あまりの喜びで我を忘れていた。彼は、どんな女の子も恋人から受けることができないような、そうした強い献身的な愛情の証拠を自分に与えてくれている。そのことを彼女は承知していた。それでもなお、彼女は彼が聞きたがっているひとことを言う気になれなかった。その言葉を一度でも言ったら最後、自分の愛に永遠に圧倒されるに違いないことが分かっていたからだ。その言葉を一度でも言ってしまったら、盲目的な崇拜で彼を甘やかしてダメにするだけだろう。その言葉を一度でも言えば、おそらく彼が聞き飽きるまで、何度も何度も彼に繰り返して言わなければならないはずだ！そして今や、彼は自分を脅すような口調になっている。そんな後で、どうして話を続けることなどできようか？彼がそんな脅しをすることなく、彼女への質問を改めないかぎり、絶対に話を続けるつもりはなかった。それで、二人は黙って歩き続けた。

「パティ」と彼はついに言った。「どんなことがあっても必ず、君には答えてもらうからね。ぼくのこと、愛してるかい？」

彼女はじっと立ったまま、彼の顔を見上げながら震えているようだった。しばらく彼と向かい合って立っていたが、それから両手を彼の肩に置いて答えた。「ええ、ええ、ええ、心の底から、心の底から——身も心も」と答え、彼女は彼の胸に頭を埋めた。

* * * * *

ブロートン大尉は自分が今まさに両腕で抱いている娘の——情熱にあふれて一途な娘の——心からの感謝に驚くと同時に喜びを感じていた。彼女は感謝の言葉を述べ、愛情の言葉を発してくれたのだ。彼女は、最高に甘い誓いを何度も何度も立てながら、自分の言葉はその心と同じように嘘偽りがないと力説するだけであつた。今いる場所から牧師館の門までの散策はとても甘美なものだった。ロンドンから当地までの距離や移動時間の長さについて、彼はもはや何も言わなかった。その代わり、曲がり角では必ず彼女を立ち止まらせた。それは、彼女の腕を自分の腕にぐっと押しつけ、彼女の大きな目をじっと見つめ、楽しい時間を引き延ばすためであつた。今ではもう彼女の口から茶化すような言葉も、彼がロンドンで着ている美服に対するからかいも、彼のロンドン往復についての笑いを交えたコメントもなかった。彼女はまったく正直にすべてを話した。今まさに示した情熱で自分の真実の愛を証明する前から彼をずっと愛していたこと、自分はよくよく考えて彼の最初の言葉を鵜呑みにするのは賢明でないと思ったこと、彼にはロンドンに戻って熟考してもらった方がよいと考えたこと、この長い夏の間に彼に忘れられてしまうのではないかと想着自分の勇気ある決断を後悔しそうになったこ

と、彼が戻って来ると伯母さんから聞かされて大喜びで心が躍ったことなど、すべて包み隠さずに話したのである。

「それでも」と彼は言った。「ぼくと会えて嬉しそうじゃなかったよね？」

「あら、そうですか？ 私のように田舎に隔離された生活を送ってる娘の気持ちは、きっと理解できないでしょうね。嬉しいなんて言葉じゃ、私の喜びは言い表せないわ。でもね、今日、とっても会いたかったわけじゃありませんよ。あなたがまた近くにいることを実感したかっただけです。明日まで会わなけりゃよかったって、今じゃそう思ってます」と彼女は答えたが、彼の腕を抱きしめている、その愛撫は最後の言葉が嘘であることを雄弁に物語っていた。

「いいえ、今晚は来ないでちょうだい」と、彼女は牧師館に通じる小さな門扉^{もんぴ}まで来ると言った。「ホントに来てはダメ。あなたが家に入ったら、しかるべき振る舞いができなくなりますから」

「しかるべき振る舞いなんかしてほしくないな」

「まあ！ それはロンドンのために取っておくんですか？ でもね、ブロートン大尉、今日はティーにも夕食にも、お招きするつもりはありません」

「お父さまときっと握手ぐらいはできますよ」

「今晚はいけません——ジョン、私から父に伝えるまで——ですかね？
すぐに伝えなきゃなりません」

「もちろんだよ」

「じゃあ、明日になったら父と会っていただきましょう。えーっと——何時にいらっしゃるように伝えればいいですかね？」

「朝食頃に」

「ダメです、ホントに。あなたの伯母さまが作ってくださってる焼いた七面鳥と冷やしたパイはどうなるんですか？ 私の家に冷やしたパイ

なんかありませんよ」

「冷やしたパイは嫌いだな」

「それは残念！ でも、ジョン、私は朝食後すぐに家を出ないといけないの。二時か三時に来てちょうだい——お願いだから。それなら、あとで一緒にペネロープ伯母さまの所に行けるわ。明日、会うことになってますから」

それで一件落着し、幸せ者の大尉は、帰り際に自分の唇を彼女の唇に押し当てようとしたが、ほとんど抵抗されることもなかった。

ブロートン大尉はオクスニー・コウンまで歩いて戻りながら、この件については翌朝まで伯母に何も言うまいと心に決めていた。すべて再吟味したい、できればひとりになって、じっくり考えたいと思ったのだ。彼は人生の一步、男に求められる人生でもっとも重要な一步を踏み出していた。その一步が賢明なものであったかどうか、よく考えてみる必要があったのである。

「彼女に会ったんだね？」と、ミス・ル・スマージャは甥っ子が客間に入って来ると、とても心配そうに尋ねた。

「ミス・ウルズワージーのことですね。ええ、会いましたよ。彼女の姿を見つけたとき、ぼくは長い散策中で、たまたま会ったんです。実はですね、伯母さん、もう寝ようと思うんだ。今朝は五時起きでしたし、その後ずっと動き回ってましたからね」

ミス・ル・スマージャは、今晚はもう何も聞けないことを悟ったので、彼に燭台を手渡し、自分の部屋に行かせてあげた。

しかし、ブロートン大尉はすぐベッドに向かわなかったし、床に就いてもすぐ眠れなかった。あのような処置をしてしまったけれど、はたして賢明だったのだろうか？ 彼は、多くの男たちがそうであるように、世俗的な問題で万事を成り行きに任せてしまうような人間ではなかった。彼はいろんな視点を自分で身につけ、自分なりの人生観を持っていた。

金銭至上主義は悪だと自分で明言していたものの、それ自体が善である事柄に付随している限り、お金もまた善だと言ってはばからなかった。今回の結婚という出来事に関しても、それに付随するものがないことを残念に思っていた。いや、それについては踏ん切りがついていたし、損失は我慢するつもりだった。生活の手段として自分自身の収入があるにはあったが、望ましいと言えるほどのものではなかった。彼は、今後の生活状況が現在のそれとまったく異なることだけを考えたとしても、自分が既婚男性になるのも悪くないという結論に完全に達していた。それゆえ、後悔することは何もなかった。パティ・ウルズワージーは善良で、愛情にあふれ、賢明で、美しい女性なので、十分に満足していたのだ。過去四ヶ月、来る日も来る日も心の中ではっきりとそう断言していたことを考えると、もし現在それほど満足していないとしたら、それは実に奇妙なことであろう。とはいえ、自分は満足してるじゃないかと今また繰り返して言ったとしても、四ヶ月前に比べると、この点についてはそれほど確信があったわけではない。こんなことを言うと実に悲しいが、それが真実であるような、そんな気がしてならない。オモチャが手に入ってしまうと、予想していた喜びの大半は消えてしまうものだ——特に簡単に手に入れた場合は。

ブロートン大尉は、このデヴォンシャー再訪の意図を家族の者たちに話していなかったのだから、彼らが満足してくれるかどうかについては自分で考えなければならなかった。女王陛下の枢密院で金色棒を奉持する親衛隊長であるオーガスタス・ガンブルトン閣下と結婚していたミス・ル・スマージャの妹は、自分の息子に対して何と言うだろうか？ この妹は両手を広げてペイシャンス歓迎し、大切にしてくれるだろうか？ それから、ペイシャンスはロンドンを気に入るだろうか？ 逆に、ロンドンはペイシャンスに似合うだろうか？ ブロートン大尉は自分が彼女に多くのことを教えてやらねばならないだろうから、時間を無駄にせず、

その教えにすぐ取りかかるのがよいと思った。彼がその夜に考えたのはここまでだったが、翌朝になるともう一歩進んで、彼女の自分に対する態度を心の中で批判するようになった。熱烈に、完璧に、当意即妙になされた自分への愛の告白——あれはあれで実に心地よかった。そう、とても心地よかった。だが——しかし——ちょっとした冗談を言ってから愛の告白をしたとき、彼女は女性の美德としての慎みに少し欠けていたのではあるまいか？ 男というものは愛していると言われるのが好きであるにもかかわらず、結婚相手の女性がやたらと男性の気を引こうとするのは望まないものだ。

ああ！ そうだ。その日の朝、彼は身づくろいの準備をしながら、そのように自分に言って聞かせた。読者の皆さんは「それなら彼は人でなしだ」とおっしゃるでしょう。筆者は彼が人でなしでないとしたこと一度もない。しかしながら、筆者は言っておきたい——天下の公道という踏み慣らされた道では、そうした人でなしに会うことは決して珍しくないのだ。ペイシャンス・ウルズワージーが冷たい返事として彼にロンドンへ戻って自分の愛について熟考するように言った時も、彼女の態度から少なくとも今はまだ彼のことに関心がないように思えた時も、遠く離れたことで彼が彼女に思いこがれている時も、彼女の魅力や才能や誠実さが自分のものになったのは、この上なく望ましいことだと思えた。それらはすべて今や彼のものである。いや、実際、最初から彼のものだったのだ。この田舎育ちの娘の心は、彼の口から最初の言葉が出た時に彼の手に落ちていたのである。彼女の告白はそのようなものではなかつただろうか？ 彼女はとても素敵——実際に、とても素晴らしい女性だ。彼は心から彼女を愛していた。しかしながら、自分をあまりにも安売りしすぎたのではあるまいか？

ブロートン大尉が人でなしではなかつたと言うつもりはまったくない。しかし、人でなしであろうとなかろうと、彼は自分に正直な男であ

った。その日の朝も、（上に述べたような疑問がすぐ彼の心に重くのしかかるようになった）その後の数日間も、彼は彼女との誓いの言葉から逃げようなどと決して思わなかった。その日の朝食時、彼はミス・ル・スマージャにすべてを話した。すると、この老嬢は思いやりのある慈悲深い考えから、自分の財産に関する使い途^{みち}を彼に打ち明けてくれた。「いつも私はペイシャンスを相続人として見てきたし、これからも今までどおりそうするからね」

「ああ、そうですか」とブロートン大尉は言った。

「でもね、このささいな財産を彼女が私の妹の子に戻してくれると思うと、とても、とっても嬉しいよ。おまえは母親の財産をもらうだろうし、私の財産を含めて、すべてが一緒になるってわけだからね」

「そうだね!」と言ったブロートン大尉は、財産については独自の見解を持っていて、伯母が一族と血縁のまったくない人間に土地を自由に譲れると考えていることは、現状においてさえ聞きたくないことだった。

「このこと、ペイシャンスは知ってるんですか?」

「いいえ、これっぽちも」と老嬢は答えた。それ以後、この件に関しては、もう何も話されなかった。

* * * * *

その日の午後、ブロートン大尉は牧師館へ行き、ペイシャンスの父親から喜びと祝いの言葉を受けた。その場にいた彼女は何も語らず、その後は実際ほとんど同席もしていなかった。それから、恋人たちはオクスニー・コウンまで歩いて行き、そこでさらなる祝福の言葉を受けた。

「すべてが結婚式の鐘のように陽気になった」——少なくともペイシャンスに関してはそう言える。彼女の至福を少しでも損なうような、そ

んな言葉は彼女の愛らしい口からはまったく漏れなかったし、そんな表情は彼女の端正な顔にまだ浮かんでいなかった。彼女の愛が確かめられた最初の日には彼にとって間違いなく幸せな日であったし、彼女がベッドの横にひざまずいて彼のために祈った時は、自分の喜びが何らかの懸念で乱されるという感覚も彼女にはなかった。

その後の三、四週間については簡単にさっと、ペイシャンスは婚約の翌日ほど楽しいと思わなかったとだけ、ここでは述べておこう。彼女の恋人の態度には何か——当初は彼女にもはっきり分からなかったことだが——次第に彼女の感情を逆なでするような何かが見られた。

ブロートン大尉は十分な愛情を示してくれていた。その点をはっきり証明してもらう必要はない。しかし、この愛情と結び付いて存在しているように見えたのは——彼女は厳しい言葉を思い浮かべるのが実際いやだったが——自分はふさわしくない女性だと彼が考え始めている、そういう可能性である。それで彼女は自問してみた——自分は彼にとって十分ふさわしいのだろうか？ その点に少しでも疑問があれば、心の葛藤で胸が引き裂かれる思いをしようとも、この縁組は解消すべきである。真実はこうだった——彼は絶対必要と思っていた彼女への教育をすでに始めていたのだった。ところで、この若い恋人の自発的な同意を得て、誰かがドイツ語や数学を教えようとしたならば、彼女は従順な生徒になったであろう。しかし、家庭教師を気取ったような男が彼女の同意なしに正しい礼儀や行儀を教えるとしたら、彼女が従順になる可能性は皆無であった。

このような事態が四、五日ほど続いた。五日目の夕方、ブロートン大尉と彼の伯母は牧師館で午後のティーに招かれた。特別なことは起こらなかったが、牧師とミス・ル・スマージャが夕方ずっとバックギャモンをひたすらやると言い張ったので、それはブロートン大尉にとって、婚約者がロンドン生活でいろいろと変わらなければならないことについ

て、少し意見を述べる良い機会となった。それで、ある言葉を——花嫁の身分をもっと上の社会的地位まで高めてやるといった、何かちょっと相手を蔑む^{さげす}ような言葉を彼は発してしまった。ペイシャンスはじっと我慢していた——父親とミス・ル・スマージャが同じ部屋にいたからだ。彼女は怒りの言葉を発することなく、古い牧師館をそれとなく蔑視するような言葉に、当座はじっと辛抱して耐えていた。やがて、夕べの集まりもお開きとなり、ブロートン大尉は伯母と一緒にオクスニー・コウンへ帰って行った。

「もう日取りは決めたのかい？」と、伯母は自宅に近づくに彼に尋ねた。

「いや、まだだよ。ここを出立する前に決めるのがふさわしいかどうか、まだ分からないんだ」

「まあ、あんなに急いでたのに、この前は」

「ああ——そうだね——あれからじっくり考えたんだよ」

「この件はパティがどう考えるかによるって、そう考えるべきだったわ」と、ミス・ル・スマージャは女性の特権を擁護しながら言った。「ご婦人が同意すれば、殿方はいつでも喜んでそうするって思われてるからね」

「ええ、普通の場合はそうですよ。でも、若い女性が自分の階級から連れ出してもらうとなると——」

「自分の階級だって！ ちょっと、ジョン、警告させてちょうだい。パティに自分の階級なんて話をしてはダメですよ」

「ペネロープ伯母さん。ペイシャンスはぼくの妻になるんであって、伯母さんの妻じゃないからね。ぼくにふさわしいと思える話題では、彼女と自由に話すことを許してもらわなきゃならないよ」と彼は言って伯母と別れたが、二人とも上機嫌というわけではなかった。

次の日、ブロートン大尉とミス・ウルズワージーは夕方まで会わなかった。あの忌まわしい言葉が彼の口から出る前は、明日の朝はたぶんミ

ス・ル・スマージャの家にいるでしょうと言っていた彼女であったが、その不吉な言葉が実際に恋人の口から出てしまったので、自宅に留まっていた。これは不機嫌による決断でも、怒りによる決断でもなく、彼と再会する前にしっかり考えた方がよいという確信によって決めたことである。彼もまた急いで彼女に会いたいというわけではなかった。彼の考え——その卑劣な考え——はこうだった。彼女は必ず自分を追ってオクスニー・コウンまで来てくれるだろう。しかしながら、彼女は来てくれなかった。それで、彼は彼女の家まで行って、一緒に散歩してくれるように頼んだ。

二人は家を出てからヘルプホウムに通じる小道を歩いたが、一緒に一マイルほど歩くまで、ほとんど何も話をしなかった。

ペイシャンスは、この小道を歩いていると、彼が到着した日の夜に一緒に同じ道を下っていた時に自分の耳で聞いた、あの甘美な言葉をはっきりと思い出した。しかしながら、彼の方はその時の甘美さをまったく憶えていなかった。この六ヶ月間ずっと自分は馬鹿な真似をしてきたのではないだろうか？　それが彼の心に強く取りついた考えであった。

「ペイシャンス」と彼はようやく口を切った。二人が牧師館を出てからというもの、彼はどうでもいいような言葉しか発していなかった。「ペイシャンス、君とぼくが今から踏み出す人生の第一歩の重要性だけど、ちゃんと理解してるよね？」

「もちろんよ。なんて奇妙な質問をするの？」

「というのは、時たま疑わしく思えるからだ。君は、自宅からオクスニー・コウンへ行く時みたいに何の苦労もなく、ここからロンドンの新居に移れると考えてるみたいだからね」

「それって非難のつもりなの、ジョン？」

「いやいや、非難なんかじゃなく、単なる助言だよ。非難だなんて、とんでもない」

「それは嬉しいわ」

「でもね、君が今から社会でどんなに大きな飛躍をしようとしてるか、そのことをできれば考えてもらいたいな」と彼は言った。それからまた二人は彼女が答えるまで何歩も黙って歩いた。

「じゃ、教えて、ジョン」と、彼女はどんな言葉を発すればよいか十分に考えてから答えた。彼女が話していると、その顔は真っ赤に染まり、両目は憤りでギラギラと輝くばかりであった。「どんな飛躍だと言うの？上への飛躍という意味なの？」

「ああ、そうだ。そうなるかね」

「たしかに、ある意味では、上への飛躍でしょうね。愛する人の妻になること、その人の幸せが自分に任されるという特権を得ること、自分がその人のもの——世界中でたった一人の選ばれた伴侶——になったんだと思うこと——それは実際に上への飛躍、その場合は天にも昇るような飛躍と言えるでしょう。でも、別の意味での飛躍のことをおっしゃってるんなら——」

「社会的地位のことを考えてたんだよ」

「それじゃ、プロートン大尉、あなたの考えは私を侮辱したことになります」

「侮辱しただって！」

「ええ、侮辱ですわ。あなたのお父さまが世間の評価で私の父よりも偉大な方であること、それは疑いようのない事実です。あなたが男性として女性の私よりも裕福であることも間違いなく事実です。ですが、こういったことが今のあなたにとって重きをなしてるのであれば、あなたは私だけでなく自分自身も辱め^{はずかし}めることになりますよ」

「ペイシャンス、自分で何を言ってるか、君はほとんど分かってないようだ」

「失礼ですが、ちゃんと分かってます。あなたが私にくださるもの

——そういう類の贈り物——はどれも、私があなたに与えてるものに比べると、まったく重みがありません。この国でもっとも偉大な領主さまの財産と地位があつたとしても、こうした私の天秤^{てんびん}では何の重みもないんです。もし——私は疑ってなかったんですが——もし私の愛情のお返しに、あなたの愛情をくださってたなら、その時は——その場合は——私にとっては十分すぎる返礼の贈り物になります。でも、そういった贈り物がないのなら、他のものは私の天秤にかけられる価値さえないんです」

「君の言うことはよく理解できないよ。ちょっと大げさじゃないかな」と、彼はしばらくしてから言った。それから、まだ夕方の早い時刻だったので、二人はそれ以上はほとんど何も話さず、歩いて牧師館に戻った。

* * * * *

その日の夕方、ミス・ル・スマージャは甥っ子に結婚の日が決まったかどうか尋ねた。

「いいえ、何も決まってません」と、プロートン大尉は厳しい口調で答えた。

「でも、帰る前に段取りは付けるんでしょ？」

「付けませんよ、たぶん」と彼が言ったので、この話題はしばらく取りやめとなった。

「ジョン」と、彼女は就寝前に言った。「おまえとペイシャンスの間に何か具合の悪いことがあるんなら、お願いだから話しておくれ」

「彼女に尋ねてくださいよ。ぼくから言うことは何もないから」

翌日の朝食が済んだ直後のことだったが、彼はミス・ル・スマージャの門の前の砂利道にペイシャンスがいるのに気づいて一驚を喫した。彼がドアを開けるために彼女の所へ行くと、彼女は手を差し出しながら、

話があって来たのだと言った。彼女の態度にためらう様子はなく、顔には怒りの表情も見られなかった。しかし、その歩き方や礼儀作法、声や顔つきには、彼が今まで見たことのない、少なくとも目を留めたことが一度もない、目的が定まったような様子が見られた。

「いいとも。一緒に外に出ようか、それとも二階に上がるかい？」

「庭のあずま屋に座って話しましょう」と彼女が答えたので、二人はそちらに向かった。

「プロートン大尉」と彼女は言った——そして、二人が腰を下ろすとすぐ、彼女は本題に入った——「あなたと私は夫婦^{めおと}の契りを交わしましたが、せっかちすぎたかもしれませんね」

「どうして？」

「お互いの性格を十分に知ることなく、この婚約をしてしまったからかもしれません、おそらく——実際、もっと言うなら——事実そのとおりなんです」

「そうは思ってたけどね」

「そう思う時がおそらく来るでしょう。でも、私たちがもっとも大切にしているもののために、手遅れにならないようにしましょう。万一、お互いの運命が結ばれたあとで、そうした考えがどちらかに浮かんたら、どんな運命が次に待ち受けていることでしょうか！　どんなに恐ろしい、悲惨なことになるのでしょうか！」

このように話す彼女の態度には彼を圧倒してしまうような厳肅さがあった。そのため、こうした話題では権威主義的な口調で話したくなる彼も、そういう口のきき方をすることができなかった。しかし、彼はほどなく普段の自分を取り戻し、「こういうことが君の口から出て来るのは良くないな」と言った。

「私の他に誰がこんなことを言うのでしょうか？　私のために戦ってくれる人など他にいるはずがありません。それから、ジョン、あなたの代

わりに誰が同じ戦いをしてくれると言うのですか？ これだけは言っておきますよ——私の方を向いて立ってる今のあなたのような考えでは、結婚式の祭壇で後ろめたさを感じることなく、真実の言葉とともに私に手を差し出すことなんか、とてもできないでしょう。私は間違っただけを言ってますか？ あなたは私と言い交わしたことをすでに悔やんでいます。そうじゃありませんか？」

彼は返事をせずに、椅子から立ち上がって庭のあずま屋の正面まで歩いて行き、そこで彼女に背を向けて立っていた。とはいえ、無作法なふるまいをするつもりはなく、どのように返事をしてよいか、実際に分らなかったのである。彼は彼女と言い交わしたことを半ば後悔していた。

「ジョン」と彼女は言って、立ち上がってから彼の所に行った。それは彼の腕に手を置くためであった。「私ね、とても腹を立ててたのよ」

「腹を立ててただって！」と、彼は急に食ってかかるように言った。

「そうよ、あなたに対して怒ってたの。まるで子供扱いされてるみたいだったから。でも、そうした感情はもう消えました。今は怒ってません。はい、私の手をどうぞ——友だちとしての手よ。二人の間で交わした契りの言葉ですが、交わさなかったことにしませんか？ そして、お互い自由になりましょう」

「本気で言ってるのかい？」

「もちろん本気です」と返事をしている時の彼女の目は、必死の努力にもかかわらず、涙であふれていた。しかし、彼は彼女を見ていなかった。そうした努力のおかげで彼女がすすり泣く声は聞こえなかった。

「心から喜んでそうするよ」と彼は言った。その口調からも、彼が相手の幸せのことを考えていないことは明らかだった。彼女が立腹していたこと——自分自身ではっきり言ったように怒っていたこと——も事実だった。だが、それにもかかわらず、どんなことを言っても、どんなことをしても、彼女は自分の幸せよりも相手の幸せを考えていた。それで、

彼女は今また腹の虫が承知せぬ気分になった。

「心から喜んでですね、ブロートン大尉！ ええ、それで結構ですわ。もし心から喜んでであれば、そうする必要性はそれだけ大きくなります。明日、お帰りになるんですね。じゃあ、今、さようならを言いましょうか？」

「ペイシャンス、ぼくは説教なんかされたくないね」

「私からだと特にそうでしょうね。今、さようならを言いましょうか？」

「ああ、君の決心が固いのであれば」

「ええ、固いですわ。さようなら、ブロートン大尉。あなたの幸せを心から祈ってます」と彼女は言って、彼に手を差し出した。

「ペイシャンス！」と言った彼は、まるで彼女を脅して従わせようとするかのように、むっとりした渋い顔で彼女の顔を見ていた——そうしたければ、なおのこと、彼はそんな試みで苦勞する必要もなかったのかもしれないが。

「さようなら、ブロートン大尉。握手してください。もう長居はできません」

彼は手を差し出したが、なぜそうしたのかは自分でもほとんど分からなかった。彼女はその手を自分の唇に当ててキスをし、それから彼をあとに残し、サマー・ハウスから切り戸を抜けて、まっすぐ牧師館へと家路を急いだ。

* * * * *

「お父さま」と、その日の午後、彼女は父に言った。「あのね、怒らないでね。ジョン・ブロートンと私、すべてが終わったの。お父さまと私、お別れしなくていいのよ」

年老いた父がどんなに驚いたことか、どんなに心の底から悲しんだことか、ここで語っても無意味だろう。彼女が父に事の経緯を語っている時に、誰かに対する怒りの理由が述べられることはなかった。その日、少なくとも今は婚約から解放されたことを十分に確信してロンドンに帰った求婚者に対して、彼女は彼の不利になるようなことをまったく言わなかったのである。

【出典】

Anthony Trollope, “The Parson’s Daughter of Oxney Colne,” *Tales of All Countries*, 2nd. ser., 1863. Originally published in *The London Review*, March 2, 1861.